

未来社会の社会像

地域社会は、地域という、「今、ここで」生きて行くための場所として、そこに居住するすべての人にとって過ごしやすい場所となるように機能することが必要である。最も重い障害を抱えた子どもたちが、地域社会に出て行き、そこでみんなに守られて生活することができるような社会が理想の社会である。孤独に寂しく引きこもっている老人や若者が、地域社会に顔を出して、周囲の人々と助け合いながら、毎日楽しく生きることができるような地域社会が理想である。人間は楽しむために生きているのである。そこにいるすべての人が楽しいと感じられないような社会は不幸な社会である。最も社会から置き去りにされる可能性の高い重い障害を抱えた子どもたちが、具体的、実質的に地域社会の一員になることができれば、すべての人がその地域社会で生きて行くことを可能にするのではないか。そうした一つの試みとして、「ぷれジョブ」と呼ばれる活動がある。毎週1回1時間だけ、地域の人に連れられて、障害を持った子が地域の企業で就労体験をする。そうすることによって、障害を持った子は、地域社会に溶け込んで行くことができる。地域の人たちが敵ではなく、仲間であると感じることができる。自分は何もできないと思っていた子が、何か社会に役立つ労働を体験することで自信を持つことができる。障害を持った子の保護者は、私たちがいなくなっても地域がこの子を守ってくれるのではという期待感、信頼感を作り出すことができ、安心して子どもの成長を見守ることができる。学校の先生は、その子が地域に迎え入れられるようサポートすることで、学校と地域社会とを有機的に結びつけることができる。障害を持った子を企業まで連れて行く地域の人（サポーターする人で、サポーターさんと呼ばれる）も、自分が預かった子が褒められ、その子が地域に馴染むのに貢献できると、それが自分自身にとって、喜びと感じられるようになる。地域の企業経営者及びそこで働く人々は、障害を持ちながら、一生懸命に何かをやりようとしている子と1週間に1時間だけという短い時間ではあるが、就労体験するその子から何か得られるものが生まれて来る。そして、その子、保護者、学校の先生、サポーターさん、企業の人、地域に住むみんなが一堂に会して、その成果を確認することで、それぞれの立場で、自分がやっていることの意味をお互いに確認することができる。半年したら、別の子に交代する。その子は、半年したら、また別の企業で別の仕事をする。それを繰り返すことで、次第にその子は地域に馴染み、地域社会は障害を持った子らに馴染んでいくことができる。このような活動を行っているのが「ぷれジョブ」と呼ばれる活動である。極めてシンプルな活動であるが、人間というのは頭の中だけの観念的な存在ではなく、一人ひとりが生身の体をもって、今ここに生きている存在であること、つまり心と身体は同じもので、誰もがその居場所を必要とする存在であることを確認することができる。地域の人々がお互いにつながりのある存在であることを確認できる。みんながその地域社会という居場所があって、初めてそこで生きて行くことができるということを確認できる。ここに近代を超えた社会の在り方を考える一つの姿が示されているのではないかと思う。それは、自分の身体を大切にし、他の人も大切にし、地球という自然も大切にする社会である。みんなが競争するだけではなく、共創しようとするなら、必ず創り出すことのできる社会である。